

# イベリアの夜 III

峰 万里恵 (うた) ☆ 高場 将美 (ギター)



スペイン・バル *Olé*

2009年1月17日

☆ ☆  
*A noite da Ibéria*

*La noche de Iberia*

I<sup>a</sup> parte

## 1. わたしは歌を追いかけてました 《ファド・モウラリア》

*Fado Mouraria "Corria atrás das canrigas"*

詞&曲：アマーリア・ロドリゲス

アマーリアさんがプロになりたてのころ、初めてつくった曲です。他のアーティストからのバッキングをおそれたのか、最初は作者不明の「ファド・モウラリア」（伝承スタイル——メロディの型——の名前）としていました。メロディは、伝承の形からほんの少しだけ変えています。そんな遠慮した曲ですが、その後の半世紀の歌い手人生を完璧に描いてしまっているのは、さすが！

わたしはうたいながら人生に入ってきた。そしてわたしの初めての嘆きは歌声になって、泣きながら行ってしまった。それはやがて、感情も連れで行った。

ほかの女の子たちと、あちこちの通りで遊びながら、わたしは街に流れる歌を追って走っていた。

わたしが立ち止まるのは自分でうたうときだけ。

もっと後には、もう、すこしおとなの女性になって、わたしは初めての愛をうたった。そしてまた、ひとりぼっちでうたいもした、わたしの最初の痛みを。

わたしは人生を過ごしてきた、楽しく、あるいは悲しく泣きながら。わたしのファドは、さまざまだった。でも、いつも変わらなかったのは わたしがうたうこと。

(ファド=歌のジャンルの名前であるほかに「宿命」という意味ももっています。この曲に限らずたくさんの歌詞で、「ファド」ということは、「歌」と「逃れられない宿命」の両方の意味をかけて使われています)

## 2. ペルセギサオン (わたしを追いまわさないで) *Perseguição*

詞：アヴェリーノ・ド・ソウザ 曲：カルロシュ・ダ・マイヤ

1930年代に女性歌手マリーア・アリス (1904-97) が大ヒットさせた、メロドラマ調のファドです。

作詞のアヴェリーノ・ド・ソウザ (1880-1946) は、印刷工などをしながら自作のファドをうたい、1910年代から大衆演劇の作者として活動しました。メロディは、カルロシュ・ダ・マイヤ (1878-1921) というポルトガル・ギターの奏者がつくったものです。ファドの一般的な伝統では、まず歌詞がつくれ、それに合った既存のメロディに乗せます。この曲のメロディ (6行詩用) はいまも人気があり、新作の歌詞にも利用されています。

わたしから得るものはなにもないのに、わたしにはわかりません、どうしてあなたが、わたしを追いまわすのだか。いつでも、どこでも、街の通りで。あなたはよく知っている、わたしが結婚し

ていることを、いつも献身的な妻であったことを、決してあなたのものにはなれないことを。

あなたはお金持ちで上流の方だからでしょう、わたしをあなたの愛人にしようと思ってる。浮気心なのか、見得のためなのか。わたしには貧しい夫がいる。彼は気高い魂をもったひと、わたしの情熱のすべて。

見張りの番兵のようにわたしは、しっかり目を開いて、昼も夜も、いつも注意深く気を配り、感覚もなくしてしまっている。わたしは、どんな瞬間にも、見廻りの歩哨 (ほしょう)、わたしの夫の名誉を守って。

### 3. かもめ *Gaiivota*

詞：アレシャンドル・オネイル 曲：アライン・オウルマン

アレシャンドル・オネイル（1924-86）は、18世紀前半にポルトガルにきたアイルランド貴族の血を引いてリスボン生まれ。詩人ですが、広告のコピーライターとして生計を立てていました。この曲は、詩ではなく、はじめからファドの歌詞として書きました。独裁政権時代に政治犯として投獄されていたときの思いが反映されているように思えます。

作曲したアライン・オウルマン（1928-90）は、フランス人の息子としてリスボン郊外に生まれ、ファドのエッセンスをつねに守りながら、ポルトガル語の詩による、たくさんの新鮮で豊かなメロディを、アマーリア・ロドリゲスのためにつくりました。

もし1羽のかもめが、飛んで描くデッサンの中で、わたしにリスボンの空を運んできてくれたら……いまわたしの前にある空では、まなざしは飛

べないつばさ。力を失って海に落ちてゆく。

7つの海を渡ったポルトガル人の船乗りが、彼の思いついたことをわたしに話してくれる最初の人になったら……新しい輝きをもったまなざしが、わたしのまなざしと結び合わさったら……

人生にさようならを言うとき、空のすべての鳥たちが、お別れに、あなたの最後のまなざしをわたしにくれたら……あなただけのものだった、あのまなざし……最初の愛だったあなた……

どんなに完全な愛が、わたしの胸のなかでときめくことだろう。愛するひとよ、あなたの両手のなかで——わたしの愛が完全に入っていた、あなたの両手のなかで。

### 4. わたしの両目は祭壇のろうそく 《ファド・メノール》

*Fado menor "Os meus olhos são dois círios"*

詞：ジョアオン・リニャールシュ・バルボーザ 伝承曲

民衆詩人リニャールシュ・バルボーザ（1893-1965）は、1920年代なかばから長いあいだ、ファドの歌詞を売って生計を立てていました。この曲は、プロ・デビュー時代のアマーリアさんが、彼から買ったひとつです。いい歌詞でなければ、いい歌はうたえませんが、自分でお金を出して買ったわけです。メロディは、昔からファド・メノール（短調のファド）という名前で伝えられてきたものを流用しました。

わたしの両目は祭壇の2本のろうそく。わたしの顔に悲しい光を投げかける。その顔に刻まれたのは、受難とサウダードと失意。

（サウダード=失ったもの、そこにはないものへの愛から生まれる、甘美な悲しみの感情をあらわすポルトガル語。ノスタルジーと置き換えられることもあるが、そのニュアンスは他言語に翻訳不可能。ポルトガルの国民感情の根源にあり、ファドを生んだ感情だと言われている。）

アンジェラスの鐘が聞こえ、午後がとうとう去って行くとき、わたしはあなたへのサウダードたちに祈る、わたしのために「聖なる父」の祈りを唱えてくださいと。

でもあなたは祈ることを知らず、サウダードも涙ももっていない。なぜなら、あなたはわたしを嫌っているのだから。なぜなら、わたしがあなたを、こんなに愛しているのだから。

高い空を飛んでいく雲のように、あなたはわたしを絶望させる。毎日まいにち、わたしはあなたを待っている。毎日まいにち、あなたはわたしのところに来ない。

### 5. テンディーニャ *Tendinha*

詞：ジョゼー・ガリヤールド 曲：ラウーウ・フェラオン

劇場音楽で大活躍したフェラオン（1890-1953）が、人気女性歌手エルミーニア・シウヴァ主演のレビューの1場面のためにつくったメロディ。台本作家ガリヤールド（?-1968）が作詞しました。

《テンディーニャ》は、元来はテント小屋の小さな露店のことですが、ここでは、2百年前から今日まで、リスボンの中心街にある立ち飲み酒場の名前です。椅子はひとつもありません。

粗野でありふれたつくりの《テンディーニャ》——この古い飲み屋こそ、リスボンの飲兵衛の歴史の不滅の金字塔。

ファドが生まれた19世紀の昔には、郊外の田

園でのパーティでもうへべレケになった連中が群れをなして、この店のバルコニーに詰めかけてきた。貴族たちと、やくざなアーティストたちが混ざり合い、みんな死んでいる時間の夜更けに、ファドを聴き、うたっていた。

この現代のリスボンにある古き居酒屋。伝統を守る永遠の酒場。古き《テンディーニャ》、おまえは強いワイン焼酎の時代のシンボル、ボヘミアンで大酒のみの時代のシンボル。

## 6. バンベーラ *Bamberas*

アンダルシア地方民謡 補作詞：エドゥアルド・ドゥラーン

昔、スペインでは（ほかのヨーロッパ各地でも）行楽や祭りの折に、森の木の枝などに布のロープのようなものの両端を結んで吊り、ぶらんこにして遊びました。そのぶらんこ綱が「バンバ」です。これをうたったアンダルシア地方の子どものうたのメロディを、女性歌手ニーニャ・デ・ロス・ペイネス（1890-1969）が、フラメンコにしてうたったのが、この曲です。作詞者は《エル・ヒターノ・ポエタ》（詩人ジプシー）と名乗っていた人です。

その後、このメロディはブレリーアという、速めの、はっきりしたリズムでうたわれはじめ、さらに踊りも付くようになりました。現在はソロでうたわれることは稀で、女性の踊るための曲として生きています。

オランダ布の真っ白なシーツと、紅絹のふとん

のあいだで、わたしの愛する人が眠っている。まるでセラフィム天使のよう。

あなたは椰子の木、わたしはナツメやしの実。あなたは野いちご、わたしはからみつく。あなたはバラの花、わたしの遊ぶ庭で。

あの上のほうには黄金の洗濯おけがある。そこでは若い娘たちが洗う、恋人のハンカチを。

あなたはひとつ、あなたはふたつ。あなたは3つ、あなたは4つ。あなたは大教会、みんなが入ってゆく。だれでもみんな、わたしをのぞいて。

## 7. わたしの花売り男 *Mi florero*

詞 & 曲：ルイス・ゴメス

ヘレス出身のヒターナ（ジプシー女性）で、天成のフラメンコの歌い手で踊り手、ローラ・フローレス（1923-95）のレパートリーです。作者については不明。リズムはタンギージョです。

娘さん、あなたの花売りがやってきましたよ。薫り高い花束。ほんのわずかのお金で、いちばんきれいな花を差し上げます！

……

ブロンド女性は、金色の花びらをもった白いバ

ラ。ブルネットは、目に黒玉を入れたカーネーション。栗色の娘たち、よく焼けていて、熱い。みんなマーガレットのように、なんにもしないのに花びらを散らせてしまう。

金髪も黒髪も栗毛も、あなたはみんな好き。スペインになくってはならないもの、あなたの庭の花たち。あなたに不思議な出来事を起こす。アイキロン、アイキリン、アイキリーン……

### 2<sup>a</sup> parte

## 1. みどりの眼 *Ojos verdes*

詞：ラファエル・デ・レオン／サルバドル・バルベルデ 曲：マヌエール・キローガ

1940年代初めに、バレンシア出身の女性歌手コンチャ・ピケール（1908-90）がヒットさせ、主人公が娼婦なので物議をかました曲です。

詩人レオン（1908-82）、脚本家（この曲では実際に歌詞を書いてはいない）バルベルデ（1895-1975）、作曲家で編曲指揮者のキローガ（1899-1988）は、セビージャ出身で（バルベルデの生まれはアルゼンチンの首都ブエノスアイレス）、スペイン歌謡界をほとんどフラメンコ色に染めてしまった人たちです。

遊び女の家の戸口に立って、わたしは燃え上がる5月の夜を眺めていた。男たちは通り過ぎ、わたしはほほえみ……やがて、あなたがわたしの前で馬を止めた。

「セラーナ（ジプシー女）、タバコの火をくれないか」「火はわたしの口からお取りなさい」

あなたは馬から下り、わたしは火を上げた。あなたの両目はわたしにとって、ふたつのみどり色の、5月の明星だった。

……わたしたちは部屋から、朝が目覚めるのを見た。物見の塔が夜明けの鐘を打ち、あなたはわたしの両腕から出て行った、わたしの口のなかに、ミントとシナモンの香りを残して。

あその後、2度とわたしは、あんなに美しい5月の夜を見ることはなかった。

みどりの眼、バジリコのようにみどり、みどりの小麦のように、レモンのようにみどり。ナイフの輝きをもって、わたしの心臓に突き刺さったみどりの両目。わたしには、もう太陽も明星も月もない。みどりの眼がわたしの命。

## 2. わたしたちむすめたち *Nós as meninas*

詩：ペロ・デ・ヴィヴィアンエス（13世紀） 曲：アライン・オウウマン

南フランスの吟遊詩人（トルヴァードール）の流れは、巡礼の道を通して、現在のスペインのガリーシア地方にある聖地サンティアゴ・デ・コンポステーラに達しました。この地方の言語（現在のポルトガル語とガリーシア語の母体）で書かれた詩は、イベリア半島のもっとも古い文学作品です。日本でいうと室町時代あたりのことばで書かれているのですが、現代人にも90%以上スラスラと意味がわかります。

この詩人については写本に名前が残っているだけで、経歴（笑）とか、まったくわかりません。また詩に出てくる地名や風習も時代の彼方に消えてしまったようです。

作曲者は現代人ですので、13世紀の音楽には、たぶん、あまり似ていないだろうと思います。気分は、ほんとうにこの詩に共感していますが。

さて、わたしたちの母さんたちは、サンシモンの教会へまいります。プラードスの谷から、ろうそくをともしに。そこでわたしたち、女の子たちは歩きはじめます、わたしたちの母さんたちといっしょに。

母さんたちがろうそくをともしているあいだ、顔立ちのよい女の子たちは、胴にきれいなリボン巻いて踊ります。若者たちが、うっとり眺めています。

このあと母さんたちには、ろうそくをともしてくださいませ、わたしたちのため、自分たちのために。そして、わたしたち、女の子たちは、そこで踊るといたしましよ。

## 3. わたしは川で洗っていた〔洗濯〕 *Lavava no rio, lavava*

詞：アマーリア・ロドリゲス 曲：ジョゼー・フォントシュ・ローシャ

アマーリア・ロドリゲス（1920-99）さんは中年を過ぎて、重い病気で長いあいだベッドに寝たきりでした。そのとき心に浮かんだ詩を、だれにも見せる気はなくノートに書きつづっていました。それが付き添いの女性に「発見」され、メロディをつけてうたうことをすすめられ……自分のためだけに書いた詩をうたうことが、結局は、彼女にふたたび生きる意欲をもたせることになりました。

この詩に作曲したのは、長くアマーリアさんと共演してきた、すばらしいポルトガル・ギター奏者です。

洗っていた、川で、わたしは洗っていた。凍らされていた、寒さに、わたしはこごえていた。

川に洗濯に行くときは、ひもじかった、おなかを空かせていた。泣いていた、ときには、わたしは泣いていた、お母さんの泣くを見て。

うたっていた、わたしはうたっていたこともある。夢を見ていた、夢を見ていたこともある。そしてわたしの空想の中で、いろんなことを空想し

たので、わたしは泣いていたことも忘れた、苦しんでいたことも忘れた。

もういまでは、わたしは川へ洗濯に行かない。でも泣くことはつづいている。もう、昔夢見たことは夢見ない、もう川で洗濯もしないのだから。どうしてこの寒さがわたしを凍らせるのか、あのころよりも冷たく。

ああ、お母さん、どんなに懐かしいことでしょう、あのころ知った、不幸せであることの幸せが——わたしの、あのひもじさが——わたしを凍らせた寒さが——そしてわたしの空想が。

もうわたしたちは、おなかを空かせていない、お母さん。でも、もうわたしたちは持っていない、なにかを持っていないときの望みを。もうわたしたちは夢を見ることができない。もう、わたしたちは、だましながら歩んでゆく。死にたい望みをだましながら。

## 4. 花売りのジュリア *Júlia Florista*

詞：レオネーウ・ヴィラルル 曲：ジョアキーン・ピメンテーウ

ジュリア・フロリーシュタ（花売り女ジュリア）という芸名の歌手は、20世紀はじめの最高のファド・アーティストのひとりでした。酒場や料亭でうたうほかに、貴族の宴会やパーティにも呼ばれましたが、一生、花売りはやめませんでした（1925年没）。ギターラ（ポルトガル・ギター）をかき鳴らしながら、メランコリックにうたったそうです。うたっていないときは、うるさい男どものことばに見事な返事で切り返す、挑発的な女性だったとのこと。

ジュリア・フロリーシュタは、ボヘミアンでファディーシュタだったと伝説は語る。ギターラのひびきに乗ってファドを生きた。花を売ってい

た。でもその愛は、決して売らなかった。

足にはサンダル、乱暴な歩きぶり、ジュリアが通ると、彼女の歌を聴こうとリスボンが足を止めた。空気の中に売り声、口には愛を語る歌。胸には花かごの、みごとに飾られた粋な姿。

おお、ジュリア・フロリーシュタ。わたしたちの記憶に、時が刻んだ、おまえの美しい物語。

おお、ジュリア・フロリーシュタ。おまえの声はこだまする、わたしたちのリスボンの、ボヘミアンでファディーシュタの、街々の夜ごとに。

## 5. 3人のモーロ娘 *Las tres morillas*

詞：アンダルシーア地方古謡（15世紀） 編：フェデリコ・ガルシーア・ロルカ

古い曲なので、歌詞もなんだか不思議で、まったく夢を見ているようです。ハエーンは、今日もオリーブの名産地のひとつです。女性たちの名前が、いいですね。アシャ（アイシャとも呼ばれる）、ファティマ、マリエン（キリスト教徒のマリーアにあたる）は、昔も、いまでも、アラブ世界で人気のある（？）名前です。

なお、モーロ人とは、モーリタニア（現在の同名の国より広い地域だった）の人という意味で、モロッコなどの北アフリカの人たち、ベルベル人ほかの混血でした。スペインに入ってきたイスラーム教徒です。

3人のモーロ娘が、ハエーンでわたしを恋に落としました。アシャと、ファティマと、マリエーン。

あてやかな3人のモーロ娘はオリーブを摘みに行った。そして、もう摘まれているのを見て、気を失ってしまった。ハエーンで失われてしまった3つの色——アシャ、ファティマ、マリエーン。

うるわしい3人のモーロ娘が、ハエーンでリングを摘みに行った。わたしははずねた「わたしの命を奪う、あなたがたはどなたですか？」

「わたしたちはキリスト教徒です。もとはハエーンのモーロ人でした」

3人のモーロ娘が、ハエーンでわたしを恋に落としました。アシャと、ファティマと、マリエーン。

## 6. リスボンがうたうときはいつも *Sempre que Lisboa canta*

詞：アニーバウ・ナザレー 曲：カルロシュ・ローシャ

レビュー華やかなりし時代に活躍した作者たちによる、ファドのヒット曲のひとつです。リスボンは世界の首都のなかでは、ずいぶん小さい部類だと思いますが、捧げられた讃歌の数は世界一かもしれません。

リスボン、わたしの友達である街、おまえは、わたしのゆりかごの詩。おまえの知っているうたを、わたしに教えておくれ。心からのうた、人を魅惑するうたを。それをわたしは窓辺でうたおう、わたしの愛するひとが通るとき。

あまりにもおまえを愛するようにさせられてしまったので、わたしはおまえを罰したいほどだ。その罰は、わたしといっしょに、同じファドをう

たうこと。リスボンには、わたしのうたったたくさんの方のファドを、とっておいてもらいたい。ずっと後に、またうたうために。

リスボンがうたうときはいつも、わたしにはわからない、うたっているのか、祈っているのか。その声は、愛情こめて、小さな声で悲しみをうたっている。

リスボンがうたうときはいつも、その美しさが人を魔法にかける。だって、リスボンがうたうときは、ファドをうたうのに違いないのだから。

## 7. ラグリマ（涙） *Lágrima*

詞：アマーリア・ロドリゲス 曲：カルロシュ・ゴンサウヴシュ

先の『わたしは川で洗っていた』はアマーリア・ロドリゲスさんが自作の詩ばかりうたったカムバック・アルバムに収録されました。この曲は、その次の自作アルバムのための書き下ろしだと思います。詩の内容は悲しいけれど力強く、前向き（？）です。

作曲者は、彼女の最後の時期ずっと伴奏をしていたポルトガル・ギター奏者です。1970年ごろから、フォントシュ・ローシャの第2ギター、80年代なかばから第1ギターで、音楽監督の役割もしていました。作曲家としては、伝統的なファドのメロディ感覚やスタイルに、それほど束縛されない音楽をつくっています。

悩みでいっぱいになって、わたしは横たわる。そして、もっとふえた悩みとともに起き上がる。わたしの胸に、もう居ついてしまったこんなやりかた、あなたがこれほど好きだというこんなやり

かた。

絶望——わたしの絶望ゆえに、わたしの中で、わたしは刑罰を受けている。あなたがきらい——わたしは、あなたがきらいと言っている。そして夜は、あなたのことを夢を見る。

いつの日かわたしは、死んでゆくのだということをおもうとき、あなたに会えないゆえの絶望のうちに、わたしは地面にショールを広げる。そしてそのまま、まどろんでいこう。

もしもわたしにわかったら——死ぬことによってあなたが、わたしのことを泣いてくれるとわかったら、ひとしずくの涙——あなたのひとしずくの涙ゆえに、どんなにうれしく、わたしは命を捨てるだろう。